

長野大学強化指定部『女子バレーボール部』13年の軌跡

Nagano University Women's Volleyball Club: 13 years of trajectory

野 口 京 子*

Kyoko Noguchi

1. はじめに

文部科学省「大学スポーツの振興に関する検討会議」は平成29(2017)年3月「大学スポーツの価値の向上に向けて」を公表¹⁾した。報告では「生涯にわたりスポーツに親しむ習慣づくり」のためにも「大学におけるスポーツ教育・カリキュラムを充実することが必要」であり、「課外活動の運営支援等を充実し、より多くの学生がスポーツに取り組む環境を整備することが必要」とし、これらを推進するため「大学の施設を利用し、大学からの助成を受けるとともに、母校への誇りや愛着、地域の一体感を醸成する存在として大学の広報活動に寄与」するためにも大学設置者による課外活動への支援が必要だと指摘している。

長野大学は地域に根ざした大学として開学され、『建学の理念』第四項の最後には「地域社会との緊密な結びつきにより、学問理論の生活化を目指す。」とある。また、第三項には「専門的技術的教育のみに偏せず、広い社会的視野の涵養を目指す。」とあり、正課・課外を問わず教育カリキュラムによって地域との一体化を推進することは長野大学の基本方針である。

平成20(2008)年当時、長野大学のすべての学部では学生募集において苦戦を強いられており、大学への帰属意識を高めつつ、大学のブランド力向上をひとつの目的として、学校法人長野学園理事会(以下、学校法人理事会)は平成21(2009)年に女子バレーボール部と女子バスケットボール部を強化指定部として設

置²⁾した。新生女子バレーボール部の活動方針は「バレーボールを通じて社会に必要とされる人材を輩出する」ため「練習よりも優先しての挨拶、気配り、気づき、笑顔を大切に」をモットーとして位置付け活動を開始した。設置当初からの大学をあげての応援・支援は期待せず、試合での成果を残すことによって在学生や教職員からの応援を得ようと考え、それなりの時間を費やすことを覚悟した。平成22(2010)年、全日本学生選手権(インカレ)に挑戦できるまでの急成長を遂げ、部員たちが切磋琢磨してきた結果として学校法人理事会が期待した成果をあげるまでに成長できた。しかしながら、長野大学の公立大学法人化により特定の学生活動に対する支援や配慮がすべて打ち切られる決定がなされた。経過措置もあり令和4(2022)年3月末、強化指定部としての活動に終止符を打つことになり、これまでの強化指定部女子バレーボール部13年間の実践をまとめことにより、地方小規模大学における大学スポーツのあり方について、ひとつの事例ではあるが考察したい。

2. 強化指定部の位置づけと設置までの経緯

学校法人理事会は平成21(2009)年4月に佐土・野口両監督を招聘し、女子バスケットボール部と女子バレーボール部を大学におけるスポーツ振興の中核として位置付け、強化指定部として各種支援を開始³⁾した。このことからわかるように、学校法人理事会主導に

よる設置であったため、「両者(法人と教学)に齟齬が生じたまま今日に至っている(平成26(2014)年3月教授会・野原学長資料より)」が、全国大会に出場する等の活躍により、広報的な側面のみならず、在学生や卒業生の大学への帰属意識の醸成にも寄与しており、さらに他サークルへの刺激にも繋がっていることが明示された。他サークルの活躍としては、上田市自然運動公園を拠点とするアーチェリー部がインカレに出場し、また軽井沢アイスパークを拠点とするカーリング部は全日本大学選手権大会で、それぞれ優勝を果たした。2つの強化指定部の活躍をきっかけに在学生らの課外活動への展開⁴⁾には目を見張るものがあった。

女子バレーボール部監督野口は、昭和53(1978)年より実業団バレーボール部日立で活躍し、昭和59(1984)年ロサンゼルスオリンピックに江上由美、三屋裕子、中田久美らと共に出場し銅メダルを獲得した。続く昭和60(1985)年には、日本で開催されたワールドカップに全日本主将として出場し、昭和61(1986)年に引退した。その後、結婚し、二人の子を育てながら信州大学教育学部生涯スポーツ課程地域スポーツ専攻に入学し、中・高保健体育教員一種免許を取得した後、同大学経営大学院(社会人大学院)にて経営修士号を授与された。信州大学「平成17(2005)年6月から平成20(2008)年3月まで非常勤講師を歴任した後、平成20(2008)年8月に長野大学(学校法人理事会)スポーツ強化プロジェクトからの要請を受け、平成21(2009)年4月女子バレーボール部監督(特任教員)に就任した。」自宅(夫の実家)は豪雪地で有名な戸狩野沢温泉スキー場の中腹に位置しており、大学まで往復約160キロの遠距離通勤⁵⁾となった。

スキー場での民宿を経営していた頃、イベント企画として「雪上バレーボール大会」を実現させた。当時ビーチバレーボールの第一人者であった選手をゲストに迎え、「将来冬季オリンピック種目を目指す」としていた。この実践をもとに国内における雪上でのバレーボール実施例を調査し、報告¹³⁾した。イベントを企画した当時はこの突飛な発想に対し賛否両論あったわけだが、地元での9年間の実施の後、スキー観光の低迷と野口の大学教員就任のため残念ながら廃止された。しかしながら、その後10年の間に世界ではSnow Volleyball(スノーバレーボール)として普及し始め、平成30(2018)年オーストリア・バークラインで開催された第1回スノーバレーボール・ヨーロッパ選手権大会を視察することになり、その視察内容について報告¹⁴⁾

した。そして、平成31(2019)年アルゼンチン・バリロウチェにおいてスノーバレーボール・ワールドリーグが開催されることとなり、世界バレーボール連盟(FIVB)より日本女子チームが招待されることになった。しかしながら、当時は日本バレーボール協会(JVA)にスノーバレーボールの組織はなく、ビーチバレーボール経験者に加え、全国大学ビーチバレーボール大会⁶⁾に出場した実績のある長野大学の学生を選出し大会に臨んだ。その後、日本バレーボール協会に「スノーバレーボール」準備室が設置され、北京冬季オリンピックにおいて、公開競技として採用される予定であったが、コロナウイルスによって大会は無観客、縮小されたため実施には至らなかった。現在、一般社団法人「スノーバレーボールジャパン」⁷⁾が設立され、日本国内での本格的な普及を推進するべく野口が理事を務めている。

一方では、長野県上田市に本社のあるルートインジャパン株式会社は平成29(2017)年に6人制バレーボールチーム「ルートインホテルズ・ブリリアントアリーズ」⁸⁾を創部した。平成31(2019)年にはVリーグチームとして活動を開始した。野口はその立ち上げ準備から関わり、現在V1昇格を目指し頑張っている。教え子でもある長野大学卒業生も選手として活躍(後述)することとなり、野口はエグゼクティブ・パートナーとしてアドバイザーを担当している。

このように強化指定部としてのバレーボール部の活躍についてはマスコミ等にも取り上げられることも多く、部員(選手)やその家族、高校などの後輩たち、大学のある地元住民はもとより、学生の大学に対する誇りや帰属意識向上にも大きく貢献したものと考えられる。主なものについて表1に要約を示しておく。

3. 女子バレーボール部選手の実績 (特徴的事例の紹介)

前述したように、強化指定部としての女子バレーボール部はバレーボールという団体競技スポーツを通じて、社会に必要とされる人材を高等教育の場から輩出することを目指し、練習よりも自らの課題を設定し、目標に向けて努力できる社会人を育成し続けてきた。その結果を総括するため、これまで女子バレーボール部員として切磋琢磨してきた選手たちの状況を個別に振り返り、これまでの状況をまとめることとする。個人を特定できないような表現に努めるが、大学の規模が小さく、選手も多くないため可能な限りの配慮であることを補足しておく。

1) FM

(平成21(2009)年入学 近隣県公立高校出身)

FMの出身高校は県大会 8 強レベルであり、高校 2 年次よりレギュラー入りを果たしている。野口が強化指定部監督として長野大学に赴任すると同時に入学したのがFM達の学年である。前年まで一般サークルとして自由な雰囲気で活動していた上級生らは、強化指定部新生バレーボール部監督の野口との意思疎通がうまくいかず、FMらは上級生と監督との間をつなぐ新入生でパイプ役という難しい役割を担ってくれた。初年度は監督としての指導よりも次年度以降の選手獲得のために活動した。

翌年(FMが2年生になり)、強化指定部選手として集めることのできた新入生 9 名(高校時代にすでにバレーボール選手としての実績・戦績がある)が入部した後も、バレーボール選手としての力の差は歴然としていたが上級生としての役割(=キャプテン)を与え、大きな困難もあったと感じるが個性豊かな下級生をうまくまとめることができた。3 年生となった段階で、自らの目標であった国家資格(社会福祉士)を最優先と考え、キャプテンを後輩に譲り、国家試験合格を果たして卒業し、福祉関連施設に就職することができた。入学当初における先輩と監督とのパイプ役を皮切りに、キャプテンとしては実力のある後輩たちを取りまとめることの経験等により、対人コミュニケーションのスキルが磨かれ、個性豊かな部員たちをチームとしてまとめることでチームビルディングやリーダーシップという役割を担えた経験は、社会人としての業務遂行能力の基盤となっていると考える。

2) NS

(平成22(2010)年入学 近隣県私立高校出身)

NSの出身高校は全国大会出場レベルであり、中学・高校時代から全国大会出場、など多くの戦績を残している。長野大学入学当初よりレギュラーとして活躍し、大学北信越大会に出場し、2 部から 1 部への昇格などの成果をあげている。前出FMの 1 年後輩として入部してきた 9 名のひとりである。同じ新入生であるが個性豊かな 9 名の同級生をまとめあげ、バレーボール選手としてはセッターとして、ゲームメイクも見事な出来栄であった。また、出身高校が全国大会出場レベルでもあり、他大学のバレーボール選手などの情報にも長けていた。大学バレーボール界 2 年目の野口にとっては、NSを仲介役にした他大学バレーボール監督や

選手などとの関係づくりにも貢献してくれ、ありがたい存在であった。

しかしながら、4 年生になりキャプテンとしての対応に課題があるように感じたことをきっかけにレギュラーから外すことになる。これまで多くの情報を与えてくれ、人脈作りにも貢献してくれた選手を裏切る行為となった。そのような状況から、選手引退時の恒例である監督との引退式でも、卒業式でも和解することができず、送りだしてしまったことがずっと心残りになっていた。一方で、就職活動は金融機関に絞り努力した甲斐があり、地元信用金庫に就職した。当時の卒業生の就職先としては会心の出来であったとき。数年後、NSの地元へ出向いた際に再会し、それまでのわだかまりを解消することができた。中学時代からバレーボール一筋で頑張り続けてきたが、大学生最後にささいなことから有終の美を飾ることができなかった悔しさをバネにして、就職活動では功を奏し、バレーボールチームに所属し活躍する傍ら、現在は仕事と 2 児の母親業をこなしているスーパーウーマンである。

3) MH

(平成22(2010)年入学 近隣県私立高校出身)

強化指定部には授業料減免制度や寮、遠征や大会参加のための活動補助費がある。このような制度があることから長野県内はもとより近隣県からも入学を希望する学生(選手)が増加していた。MHは甲信越でもトップレベルの高校バレー部にて活躍しており、入学当初から期待された有望株。特に創部もない年度であるため部員も少なく、1 年生からスタメンとしてリーグ戦にも登録となる。5 月から始まった北信越リーグ戦でも活躍が期待された。

リーグ戦のある日、接戦の試合はフルセットを迎えることとなる。試合前の空き時間に一瞬ベンチから離れ戻った時にはMHがコートに蹲っていた。診断の結果は膝の靱帯損傷。その日から過酷なりハビリ生活を余儀なくされたが、彼女は黙々とそのリハビリをこなした。大学からアパートまでの道のりもリハビリの一環としてとらえ、雨でも雪でも一度も車に乗ることはなかった。少し回復してきた頃、本人からジャンプはしないがバックでのプレーをやりたいと申し出があった。監督としては危険回避の意味も含めて拒否をしたが「自分でコントロールするから大丈夫です。」とコートに入ってしまった。その数分後、今度は反対側の膝の靱帯を痛める結果となった。最終学年の春の大会では引退試合となる

ことからピンチサーバー(本来のポジションではない)としてコートに立つことができたのはチームとしても家族にとっても嬉しい時間であった。怪我との戦いになった3年間ではあったが、大好きなバレーボールへの復帰に向けたリハビリを頑張れたことは彼女にとっても大きな試練を乗り越える経験になったと思う。晴れて卒業を迎え、地元企業への就職を果たしたことを喜ぶたい。また、つらい思いをしたはずの上田が好きで、何度も足を運んでくれている。

4) ES

(平成22(2010)年入学 近隣県私立高校出身)

全国9ブロックごとに高等学校1、2年生の長身選手を選抜して競技力の向上を図ることを目的に、日本バレーボール協会と全国高等学校バレーボール専門部が共催で、「長身選手発掘育成合宿(高校選抜候補選考合宿)」を開催している。ESは平均的な身長であるにも関わらず最高到達点(ジャンプ力)のある選手として合宿にも参加しているほどであり、小学校・中学校と日本一にもなっている。高等学校でも有能な選手として活躍しており、長野大学への入学を打診したがすでに他大学への入学が決まっているようであった。その高校時代の最後の大会を視察したところ、プレーの様子が違っていた。試合終了後にはコートで倒れ病院に搬送されてしまう状態であった。そのような健康状態ではすでに内定していた他大学への進学も困難となり、長野大学の一般入試(学力型)により入学してきたという経緯がある。

入学後、無理をさせずに少しずつ練習に復帰できるように本人のペースを基本として、体調はもとより精神的な回復を目指してさまざまな配慮を重ねてきた。何とか試合に出場できるまでに回復し、試合にも参加できるようになる。ある試合では、首の皮一枚で負けそうな瞬間、彼女がしのぎ、コートでニコニコ笑う。ここまで回復するには仲間の大きな支えがあったはず。4年生になりESは「長い間バレーボールしかしてこなかった。大学にいる間に他の事をしてみたい」との話を聞き、バレーボールシューズをゴミ箱に入れ引退させた。将来、さらに選手として活躍することも予想できたが、高校時代のこともあり、本人の希望する道を選択させることにした。保護者の期待も裏切る形となった。苦しい時期を乗り越えた先に何が見えるのか、今後に期待したい。

5) SM

(平成22(2010)年入学 近隣県公立高校出身)

新生バレーボール部になりまだ日が浅い年度ではあるが、高校の先輩が活躍しているという理由で長野大学への入学とバレーボール部への入部を希望してきた学生である。バレーボール中心の大学生生活というより、本来の大学生としての姿勢(卒業後の進路に向けた資格などを目指す)からベンチを温めることが多かったが、文武両道を目指して努力を重ねた学生のひとりである。

強化指定部としては、競技力向上のための練習を主体とした日常生活となり、大学生らしい学内行事や委員会活動などに参加することもなかった。しかし、SMはバレーボール部員として競技力以外の面においてバレーボール部の存在価値を高め、戦績などの結果を情報発信したいとの思いから、高校生らが大学を見学する機会となるオープンキャンパススタッフや、新入生の円滑な入学後の生活を立ち上げる支援のための新入生オリエンテーションスタッフを率先して引き受けていた。そして、グループにおいてリーダー核として活躍しつつ、バレーボール部選手の勧誘にも尽力した学生である。バレーボール部の活動に不安を覚える高校生に対して、勉強面や寮生活を中心とした生活面における細やかな情報提供をすることで安心して入学を決めたという学生もいる。これらの情報発信には、バレーボール部員として(レギュラーではないにせよ)試合や大会には帯同し、裏方となって活躍したSMの経験に裏打ちされた確かな情報があったからこそである。これらの経験は、卒業後から勤務している福祉関連施設でも役立っているに違いない。

6) MM

(平成22(2010)年入学 長野県公立高校出身)

新生バレーボール部は上級生が少なく、同学年での意見の相違から衝突が絶えなかった学年でもある。強化指定部としての将来ビジョンや伝統もないため、一つひとつ作り上げる段階でもあり、試行錯誤の連続であった。チームにはコーチやマネージャーも置かず、全て監督一人で取り組んできた。それは、最初だからこそチームの運営方針などを明確にするためでもあった。しかし、評価するものが一人しかいない逃げ場のない環境であったこともいがある。

そのような時期において、学生間のトラブルや問題ごとを監督に伝わる前の段階においてうまく解決して

くれていたのがMMであった。試合開始直前まで、勝敗を左右する要因となりそうな学生への対応を、自分のことは二の次に回して買って出してくれ、「先生、ここは私に任せて試合に集中してください。必ず勝ってくださいよ。」とコートに送り出してくれた。MMのように技術面では常にコートに立つことが難しい選手でも腐らずに、意識を高く持ち、周囲へ目を配ることができ、自然に監督のサポートを買って出してくれる選手が増えていることがとてもうれしかった。「バレーボール選手を育てるのではなく、バレーボール競技を通じて社会に必要とされる人材を育てる」という信念が伝統となり、共有され始めるのに5年を要することになる。MMは、バレーボールにおける戦績こそ少ないものの、卒業後は地元福祉関連に就職し、周囲に目を配ることのできる経験を生かし活躍している。

7) HI

(平成23(2011)年入学 近隣県私立高校出身)

HIは中国からの留学生であり中学卒業後すぐに日本の高校へ留学した。高校時代に同じ寮で面倒を見てもらった先輩が進学した長野大学というのが入学した理由である。高校時代は日本語の勉強もさることながら生活習慣や価値観、文化の違いから苦労してきたことが推察できた。そのような体験があるからこそ、信頼のおける先輩の存在が安心を与えてくれたのではないかと思う。

大学入学当初から体格に恵まれ、日本語での意思疎通も十分であり、明るい性格が功を奏していた訳だが、慣れない環境に馴染むことがまずは必要と考え、無理をさせずに見守ることにした。長野大学には中国(中華人民共和国)からの留学生が比較的多く在籍しており、また外国語として中国語を選択する日本人学生も多くいたことによりコミュニケーションで困ることはなかったようだ。しかしながら、授業料減免など経済面での支援はあったものの(日本における物価高もあり)親元からの仕送りだけで暮らしていくのは難しい。留学生全体に言えることだが、日々の暮らしを維持するためにはアルバイトは認めざるを得なかった。ある日、「もっとアルバイトを増やしたい。」と相談してきたが、強化指定部選手として各種支援を得ている以上、認めるわけには行かなかった。文化的な背景の違いもありチーム内で孤立し、精神的にも不安定になり、泣きながら中国の母親に電話をしていることを知ることになった。中国語のわかる職員に翻訳してもらい手紙を

母親へ送った。異国の地で苦しんでいる娘の姿を、母親はいたたまれない思いでいるだろう、と。返信には「同じ母親としてあなたを信じて娘を預ける。娘を見守って欲しい。無事に卒業し、帰国させてほしい」と書かれてあった。それを受けバレーボール部を退部させ、生活のためにバイトを増やし、学業面でも出席や成績をチェックするなど見守った。少しおしゃれになり明るくなった彼女は無事に卒業し、中国との貿易に関係する企業に就職し、頑張っている。

8) NE

(平成23(2011)年入学 長野県私立高校出身)

NEは大学至近の地元私立高校からはじめて入学してきた選手である。高校時代は複数回、長野大学バレーボール部との練習試合を行いつつ、大学でもバレーボールをしたいと入学してきた。長身でセンスあるミドルプレイヤーであり、とかくブロックの読みがよく、長野大学が全国でも名前が出るようになり注目される選手に成長した。

5年に一度、長野県内で北信越大会が実施される。この年は長野市で開催されることになっていた。試合前日、同級生の選手と「明日は頑張ります。お先に失礼します。」と元気よく体育館を出ていったその数分後、追突事故を起こしたとの連絡が入った。赤信号により停車したところ、後ろから走ってきた同級生の車に追突され、その反動で前方車両に追突した。まず怪我の程度を心配し、2人のスタメンがいらない試合は考えられず棄権を覚悟した。幸いスピードがあまり出っていなかったため、本人たちの怪我も軽く、巻き込んだ方は車の修理のみで終わった。試合当日、試合には出さなかつもりでいたが、出場すると聞かない。保護者とも相談し出場はさせた。監督としては、棄権が回避され、怪我が軽かったこと(事後談で軽いけがでなかったことを保護者から知ることになったが)、主管県として運営に走り回っていたため、チームに集中できず結果もよく覚えていないが、安堵したことを覚えている。試合に出たいという選手の思いを優先させ、大きな後遺症を残すかもしれないとの判断を誤ったことが今も悔やまれてならない。それまでもとにかく無理をさせないことを念頭において指導してきたにも関わらず苦い経験であった。彼女は過日、2歳になる息子を連れて体育館に遊びに来てくれたことが大きな喜びである。

9) WY

(平成24(2012)年入学 長野県私立高校出身)

WYは県内でも有数の強豪バレーボール部を有する私立高校から、はじめて長野大学に入学してきた。出身は大学のある地元であり、身長は大きくないもののジャンプがあり、様々な細かな技術を習得しており、高校時代より彼女のプレーを見るのがとても楽しみな選手であった。勝負やプレーに対して決して妥協を許さず、徹底的に迫及する選手でもあった。同期入学のリベロプレーヤーと常にチームを引き上げるために、納得いくプレーができるまで練習をやめない。

妥協を許さず、ミスを減らしていくことは強化指定部としてのバレーボール部ではあるべき姿であるが、チームプレーとしての競技種目にあっては難しい一面もある。彼女たち2名があまりにもストイックすぎることから他のメンバーがついていけない状況になっていく。頑張る彼女たちがコートでプレーしやすいようにと放任してしまい、爆走する彼女らの態度を見て見ぬふりをしていたこともあった。その後、同期のリベロプレーヤーが怪我をしたこともあり、少しずつ緩和されていくことになる。チームとしては少し緊張感のない腑抜けた状態は否めないが、監督自身が勝負に執着したあまり、頑張る2名に目が行きすぎてしまい、チームとして周りの選手に対して気配りがおろそかになっていたことに気付かされた。WYは怪我などを経験したことで、周囲への配慮や気配りなどもできるようになり、現在は地元の福祉施設職員として頑張っている。

10) AN

(平成24(2012)年入学 関東私立高校出身)

ANは関東圏でも強豪として知られるバレーボール部のある私立高校から初めて長野大学に入学してきた。監督の自宅が民宿を経営しており、高校時代に何度か合宿に訪れていたことがきっかけとなった。150センチ足らずのリベロプレーヤーで、どんなボールも落とさない根性のある選手である。身を挺して拾い上げるそのボールへの執着心は誰もが息をのむほどだった。そのプレースタイルから当然のことながらその代償として、いつも体中怪我だらけである。特に、膝に関してはプレーを継続できるレベルではないが、本人は絶対に休もうとしない。少しでも痛みの少ない状態でコートに送り出せないかと思案し、関東圏の膝の名医を訪ねることになった。

大学から車で片道4時間かけて治療とリハビリを

受け、翌日の授業を休ませないために日帰りした。帰宅した時には日付が変わっていた。絶対に練習を休まないという彼女の思いと、少しでも痛みを軽減した上で試合に出てほしいと思う気持ちが突き動かし、複数回の治療を受けた。今思えば、よくそんなことができたと思う。その後、保護者の同意を得た上で、バレーボールをあきらめ手術することを決めたが、彼女は受け入れることはなかった。最後の試合はギリギリまでコートで戦い、「勝ち」を確信した時、初めて自らコートからでて、「もう、これで大丈夫ですよ。あとは頼みます」と、先輩プレーヤーにゆだね、震える足を引きずりながら笑っていた。長野大学の伝統、強化指定部の勝敗。このような選手(学生)の犠牲を払ってまで守るべきものなのだろうか?と疑問を持つ。彼女たちの頑張り、いや死闘というものを大学運営者は理解できるのだろうか。勝つことを一番の目的にすることは本意ではないが、大学の期待はやはり勝利することであった。

引退後、怪我で苦しんだ経験を生かすために医療事務の資格を取り、スポーツ専門病院に就職した。また、膝の手術とともに肘の手術も受けることになる。現在、一児の母としても忙しく暮らしている。

11) KH

(平成24(2012)年入学 近隣県私立高校出身)

KHの出身私立高校は全国大会出場レベルであり、高校の先輩2名が入学していたことから長野大学に入学した。特に、先輩の1名と仲が良かったこと、リベロプレーヤーであり様々なサポートを手掛ける選手でもある。コートでの活躍はピンチサーバーとして試合の流れを変えたりすることもあったが、積極的にマネジメントを引き受けるなど気配り上手な選手である。選手の採用が優先されるため、マネージャーというポジションは、ケガや病気によってプレーができない選手が担うことが多い。選手に復帰したいという思いが強く、重要な仕事や長期に係る役割を担わせることは難しい。

KHは自ら選手のポジションは維持しながらも、積極的にマネジメントにも関わられる選手であり、快く仕事を引き受けていた。しかし顔に出さないタイプでもあったため、正直なところはわからない。学生としても人当たりの良さが印象的であり、卒業後は自動車販売業を志望し、見事に内定を取り付けてきた。営業部門に所属し、社内では売上台数1位を取ったと嬉しそうに報告してきてくれたこともある。高額な車を販売する資質

は選手時代の経験からも納得がいく。今後の活躍に期待したい。

12) OM

(平成25(2013)年入学 北陸私立高校出身)

OMの出身私立高校は県内有数の強豪高校である。OMは176cmの長身に加えパワーもあり、いくつかの私立強豪大学から入学を勧められていたこともあり、長野大学への入学はないと思っていた。性格的に温厚なところもあり、母親は強豪大学への進学について心配をしていた。大学は学生を社会に送り出すための準備機関であり、スポーツはそのツールの一つではない。これが野口のポリシーであり、無理をさせず本人に寄り添うことを基本としていた。子を持つ母親の思いはみな同じであり、OMの母親と話をした時も子育て論に花を咲かせただけであまりバレーの話をしなかった記憶がある。親子との話し合いの結果、長野大学を選択してくれることになり、「野口さんに娘を預けたい」と入学が決まった。勝負をかけるにも優しい性格が邪魔をすることもあったが、天真爛漫なとても素敵な学生であった。

入学当初からデザイン分野に興味があり、文武両道でがんばっていた。その後、文武両道をしっかりと修め、教育系大学院に進学し、教員免許を取得後現在も頑張っている。

13) US

(平成25(2013)年入学 長野県公立高校出身)

USは長野県北部の出身であり、地元の公立高校を卒業し、長野大学に入学してきた。入学にあたり卒業時における目標を公務員試験合格としてきたこともあり、4年次の春の大会には出場せず、公務員試験に焦点を絞るというビジョンを持ち、4年間ぶれることなくコツコツと積み重ねてきた。結果、卒業後は隣県の市役所職員として頑張っている。

USは他の学生からの信頼も厚く、誠実であることからキャプテンとしての任務もこなした。大声でリーダーシップを発揮するタイプではなく、物静かで一人一人の話に耳を傾けるタイプではあるものの、自分自身の価値観として間違っていると思うことには絶対に屈しない強さも持っていた。大きな大会を目前に、選手間の仲違いなどが露呈した折には練習を止めさせ「こんな状態で試合に出ても意味がない。」と出場辞退を申し出たキャプテンでもあった。結果としては大会1週

間前に様々な問題を解決させることで出場できたが、出場辞退という切り札を出すキャプテンは他にはいなかった。現在、キャプテンの経験を存分に発揮しながら頑張っているに違いない。

14) ME

(平成25(2013)年入学 長野県公立高校出身)

MEは小学生の頃、野口が関わる地域スポーツクラブに参加しており以前から接点のあった学生である。そして10年後、長野大学に入学してきた。入学後は怪我が多く、特に試合が近づくと状況が悪化することから、ベンチを温めることが多かった。

4年生最後の大会でもベンチにいた。すべての試合が終了した折、引退選手が挨拶する場面では「私は4年間一度もこの大会(春・秋北信越)のコートに入ることができなかった。」と悔しさをにじませた。監督として4年間8回のチャンスに、一度もコートに立たせることができなかったことに気が付かなかった。チームとして勝負も大切ではあるが、小学生の頃に出会い私を慕って大学に入学してきた選手の思いを汲み取ることができなかった。文武両道としてがんばった甲斐があり、卒業と同時に国家資格(社会福祉士)を取得し、地元近くの医療機関で活躍している。

15) TM

(平成25(2013)年入学 長野県公立高校出身)

平成25(2013)年度長野大学入学希望者に対する説明会をTMの在籍していた高校生に対して実施した時、野口が有望だと考えていた実力のある選手は全く興味を示さず、関心をもち受験し、入学してきたのはジャンプ力があるものの身長170cmに満たない小柄なTMであった。しかし、TMはなくてはならない存在となるのである。マネージメント力がすぐれているわけでもない。とにかくいつもぶれずに平然として監督の横にいる。落ち込んでいると励まし、慰め、困りごとがあるととにかくTMを呼び解決策を探した。

ある夜、翌日からの大会(仙台市)に参加したくないという選手の話聞くために夜間に出かけた折、縁石につまずいて顔面を強打してしまった。立ち上がることもできずTMに助けを求めた。彼女はすぐに駆けつけてくれ状況を把握した上で救急車を呼び、病院まで付き合ってくれた。病院では入院を勧められたが翌日からの大会のこともあり、翌早朝のバスに乗っていた。顔面傷だらけ、縫合した顎の大きな絆創膏を隠すために

マスクをした状態で、他の学生からは大笑いされた。待ち時間にみんなでプリクラを取ったが、真相を知るのにはTMだけ。結局悩んでいた学生の話は全く聞いてもやらなかったが、顛末を知ってか知らずか、大会には参加してくれた。周囲の状況を把握し、適切な判断力を形成することができるのもチームスポーツなのではないだろうか。引退後の就職活動では大手住宅メーカーに内定をもらい、卒業後は営業職として活躍している。

16)KR1, KR2

(平成26(2014)年 長野県私立高校出身)

双子の姉妹は長野県でもバレーボールで有名な中学校で全国優勝を果たし、高校でも全国出場した経験豊富な選手たちで、母親はかつて実業団の監督を務めていた時のマネージャーであったという縁から入学してきた。ただ、入学までには紆余曲折があった。姉妹の兄が私立大学に進学していることから2人は就職の予定であった。しかし、当時の強化指定部には経済面や生活面における各種支援があり、また大学には兄弟姉妹に対する減免制度もあったことから入学につながった。

入学前から家族ぐるみで付き合うなどの関係性もあり、幼少期から見てきた姉妹を、中学高校と試合経験が豊富であったことから有望視してきた。長野大学バレーボール部にとっては全国大会出場などの経験がある学生は少ないこともあり、KR1は主将、KR2はプレーイングマネージャーとして支えてくれた。この姉妹が中心となって活動していた時期はこれまでも増して安心感があった。特に、部員数が多く、多彩な個性ある選手が多いながらもよくまとめてくれていたことを思い出す。姉妹という連携もさることながらこれまでの経験を生かし、チームとしてまとめるためには自分たちがどう行動したら良いのかを自覚していたのだと思う。KR1はエネルギー関係、KR2は旅行関係の企業に就職したがコロナも影響し転職、姉妹がそれぞれの道を進んでいく機会にもなった。

17)AR

(平成26(2014)年入学 長野県私立高校出身)

長野県内でも歴史と伝統のある私立高校で、スポーツにも力を入れている高校からの入学者である。ARは小さいながらもジャンプ力もあり、攻守に安定しておりサウスポーでもある。とても気配りのできる選手であっ

た。大学入学前における中学・高校での生活指導、あるいはそれ以前における家庭でのしつけから身に着いた行動と考えられるのが玄関の履物やトイレのスリッパなどは気が付けばARが揃えていた。ゴミが落ちていてもそっと拾っている。上級生になってからも下級生と一緒に雑務をさりげなく手伝っている。現在、ARは隣県で福祉関係に勤務している。自分のできることを精一杯努力しているにちがいない。

大学スポーツにおける「4年生は神様」という言葉は好きではない。ただ学年が上がっただけでなぜ神なのか。卒業し社会に出てしまえば一番下となるのだから、その準備期に充てるべきであると思う。ある都市銀行の役員から次のような話を聞いたことから明らかである。毎日一番早く出勤し、机を拭いている新入社員(チームスポーツ出身者)がいた。「なぜ、君は毎日早く来て机を拭くのか?」という質問に対して、「同期の人たちはみんな有名大学の出身で学力もあるけれど、今の私にはこのくらいしか貢献できることはありません。一番新人が一番先に来て掃除をすることは当たり前のことですから・・・。」と笑顔で答えたという。

18)MM

(平成26(2014)年入学 長野県公立高校出身)

長野県南部(南信)の高校にバレーボールをしている長身選手がいるとの情報があり、試合を観戦しにいったが、残念ながら本人は怪我で出場していなかった。高校で指導を担当されている先生とMMとを交えて話をする機会を作って頂いた。当時、祖母との二人暮らしであり、家庭環境から大学進学は難しいと考えていたようだ。プレーを見ていない選手ではあったが、話をする中から彼女が持つ人間味に惹かれた。天真爛漫な人懐っこい笑顔の裏には、それまでの暮らしの中では大変なことが多かっただろうと予測することができた。高校での評価も高く、周囲からもとても愛されていることが伺い知ることができた。バレーボールをすることはとにかく、大学に進学することで、しっかりと人生を歩ませたいという親心が芽生えた。

入学後、強豪校でないにしてもバレーボール部での活動をしていればこのくらいは当たり前という行動が全くできず、チームの動きにもついていけず毎日泣いてばかりいた。しかし、周囲のサポートもあり少しずつ環境になれ、プレーもどんと伸びていった。長身に加えて長い手足としなやかな体は、ワントempo遅いリズムでのバレースタイルとなり、いつの間にか長野大学には

なくてはならない戦力となった。現役最後の試合では負けた悔し涙と共に、やり切った笑顔があふれていた。卒業は娘を嫁に出した気分でもあったが、現在、地元に戻り大手製菓企業で第2の人生を歩んでいる。

19)HR

(平成26年(2014)入学 長野県公立高校出身)

長野県南部(南信)の高校出身で、セッターとしてのセンスがあり、バランス力、コントロール力、正確さなど、見た目の派手さはないが安定した実力を持っていた。3年時には北信越選抜選手に前出MMと共に選ばれている。セッターはチーム作りの中枢であり、セッターが変われば別のチームにもなる。HRがスタメンで出場する春の北信越リーグ戦では勝利を確信しながらリーグに臨んだ。

春季リーグは3日間で5試合5セットマッチをこなす大変厳しい試合である。長丁場が予想されるため、けが人を出せない、また休ませながら戦える選手層の厚さが求められるが、長野大学はいつもギリギリの人数で戦っていた。まさに、このリーグの第一試合の序盤において、HRがコートに倒れこんだ。腰を痛めたようだった。チームの中心であるセッターが、である。勝利どころか入れ替え戦(1部2部の昇格や降格が決まる5試合)に回る可能性もあった。しかし、入学して1ヶ月しかたっていない控えの1年生がこの場面をしのぎ、試合に勝利した。本人もさることながら、周りの選手の対応力と、土壇場に立たされた時の開き直った強さに驚いた。誰が言った言葉か覚えていないが、「先生、ここにいる全員が長野大学の選手ですから、長野大学が勝つためにやるだけです・・・」。この悔しさと周囲への信頼とをバネに現在は地元企業で活躍している。

20)KK

(平成26(2014)年入学 北陸私立高校出身)

KKの出身高校バレーボール部とは野口が長野大学バレーボール部監督に就任する以前から交流のあったチームである。このようなチームの信頼できる監督から推薦を受け、大学に進学してきた選手でもある。高校から活躍してきたKKのバレーに取り組む姿勢は大学での4年間ぶれることなく、コート中でもほとんど喜怒哀楽を表さず、リベロプレーヤーとして冷静に状況判断ができる選手でもあった。メンバーから外されても顔色を変えることもなく、采配について意見するこ

とも一度もなかった。

ただKKは睡眠コントロールに対して不安を抱えており、寝坊することが多かった。この症状を周囲が理解するまでは時間にルーズな選手と扱われ苦しんでいた時期もあったが、仲間の支えから克服し、選手としても大学生としても安定した生活を送れるようになったのは言うまでもない。現在は、本人の希望通り地元の商社に就職し、周囲からの信頼も厚く活躍している。

21)UR

(平成27(2015)年入学 関東公立高校出身)

URは長野県内出身ではあるがバレーボールのために関東の近隣県にある強豪校で活躍した選手である。長野大学には公務員を目指すとの目標を明確にして入学してきた。公務員試験の多くが4年生初春から開始されることもあり、受験対策などへの対応から3年生秋に引退することになった。

URは聡明で明るく、周囲とも和やかに何ら問題なく活動していたことが印象的である。公務員対策という特別コースに在籍していたこともあり、課外授業なども多く練習には遅れて参加することもあった。そのため、他の部員への後ろめたさもあったようだが、将来のための目的達成には必要な行程であるといいきかせ、退部をさせず卒業させた選手の一人でもある。実際、公務員試験では苦戦し自信を無くしていた時期もあったが、文武両道を実践した経験を生かし、結果的には東京特別区採用試験に合格し、区職員として活躍している。

22)MR

(平成27(2015)年入学 北陸私立高校出身)

MRは障がいのある家族とともに育った経緯もあり、障がい者への理解や知識を深め、教育職員免許取得を目的として長野大学へ入学した。明るく誰にでも好かれるおおらかな性格の持ち主であり、バレーにもその性格は生かされ、彼女がコートに入るとムードメーカーとしてチームがぱっと明るくなった。

文武両道を志しながらも、教育職員として必要な実力は意欲とは別に、なかなか身につくものではない。教育職員養成課程の教員からも、仲間からもあきらめてはどうかという境地に追い込まれ、それぞれの場において苦戦していたようだ。冷たい視線と失笑の中で耐え続け、黙々と努力する姿にやがて教員も仲間も彼女の頑張りを認めるようになったという。最終的にはそ

こ力を発揮し、合格ラインギリギリまでにたどり着いたようだが、採用試験当日に体調を壊したことから受験できなかったという苦い経験をした。現在は初心を忘れず障害児の福祉施設で笑顔を絶やさず働いているという。

23)HK

(平成27(2015)年入学 長野県私立高校出身)

HKは長野大学が所在する地の出身であり、高校スポーツでも有名な地元私立高校時代よりジャンプ力があった。高校のバレーボール選手として何度も練習試合に長野大学へ来ていたこともあり、長野大学への入学を決め、バレーボール部に入部した。4年時には個性豊かなチームをまとめるキャンプとして務めあげた。

平成29(2017)年、上田市を本拠地とする長野県初のVリーグチーム「ルートインホテルズ ブリリアントアリーズ」の選手として契約することになり、長野大学初のVリーガーとなったのは喜ばしい限りである。ベンチスタートが多いが、ピンチには登場し、チームを劣勢から脱出させるムードメーカーとして活躍している。学生時代からの機動力を生かし、現在は最年長者として副キャプテンを務めるに至っている。チームをまとめ、今後V1昇格に向けて活躍が期待されている。大学後輩達のあこがれの存在である。

24)SM

(平成28(2016)年入学 長野県公立高校出身)

SMは地元公立高校バレーボールチームの中で一人目立った活躍をしていたのが印象に残っている。長身のミドルプレーヤーで、両親が福祉職であることから社会福祉士の資格を目指して長野大学に入学してきた。4年次にはキャプテンを務め、当時1年生であった妹SF(別掲)と共に姉妹でコートに立つことになった。SMは大変なエピソードの持ち主である。ある日の練習帰りに自転車に乗ったまま、高齢女性が運転する車にはねられた。事故処理をする警察官はフロントガラスの割れ具合から命はないと判断したらしい。連絡を受けて急行した救急病院のICUを探したがいない。何と彼女は病院の外にあるベンチに座り携帯で話をしていた。背中のリュックサックがクッションとなり衝撃を和らげ、金具の部分でフロントガラスが粉々になったのだと後で知った。少し怪我はしたようだが大事に至らず安堵した。一つのバグが奇跡的に命を守った強

運の持ち主である。

平成31(2019)年夏、南米アルゼンチンにてスノーバレーボールのワールドリーグが予定され、ビーチバレーボール全国大会出場の経験があるSMに声をかけた。南米アルゼンチンまで、監督が帯同することを条件に参戦することとなり、日本代表選手として初のスノーバレーボーラーとなった。現在、SMは総合病院の福祉職として元気に勤務している。

25)MS

(平成29(2017)年入学 近隣県公立高校出身)

MSは公立高校では珍しくスポーツに力をいれている高校出身であり、高校バレーボール部ではキャプテンとして活躍していた。長野大学には、社会福祉士の資格を目指して入学してきた。長野大学バレーボール部にはマネージャー業務の担当を視野に入れた上で、進学を勧めてきた学生でもある。過去において選手として入学してきた学生が、マネージャーに転身することは格下げと捉えられることが多かった。MSの聡明さや利発さはマネージャーに向いていると判断した。この学年は入学時から公立大学法人となる私立大学最後の入試であり競争倍率が高くなったこともあり、部員が少ない年でもあった。バレーボール部にはMSを含めて2名の新生が入ったが、1名は事情によりすぐに退部したため、初めて学年一人となった。コート内で選手の世話をするマネージャーではなく、実務的作業を担当するマネージャーとして、3年次には長野県での北信越大学リーグバレーボール選手権大会主管を担い、他大学の学生とも調整しながら見事に大会を成功に導いた。これまで表面に出るのは選手としての活躍が評価された場面だが、北信越の大学バレーボール選手を束ね、大会運営を成功させた実績は称賛に値する。現在は、社会福祉士として長野県北信地域の就労支援施設で活躍している。

26)SF

(平成30(2018)年入学 長野県私立高校出身)

SFは長野大学が所在する地の出身であり、高校スポーツでも有名な地元私立高校の先輩に憧れ、野口に教を請いたいと公立大学法人長野大学を受験した。公立大学としての初めての入試であり、競争倍率も高くなることが想定され、学力的な面において心配したが、しっかりと入試に向けた準備を行ってきたこともあり合格は周囲の関係者を驚かせた。センター試験で

の入学定員を増やしたことから総合型選抜入試は定員減となり必然的にスポーツ組織の衰退が予想されたが、競走倍率の高い入試を突破し入学してきた学生が6名いた。SFはとても誠実な性格で、仲間からの信頼も厚く、強化指定部として最後のキャプテンとなりチーム作りに専念した。

令和2(2020)年から始まったコロナ禍の影響を受け、練習時間はほとんどなく、春の北信越大学リーグ大会は2年間中止となった。やっと開催された4年生最後のインカレ予選大会も、開催にはこぎつけたが、練習もままならず未練が残る大会となった。SFは現在県内の有名なスポーツクラブのインストラクターとして活躍している。

27) TK

(平成30(2018)年入学 長野県私立高校出身)

TKは長野県内の強豪校である私立高校でバレーボール部監督の自宅に下宿しながら高校時代を過ごしてきた。おっとりした性格でいつもマイペースであり、周りが騒ぎ立てていても静かに状況を把握しながら一歩下がって見守るタイプの選手である。さぼりはしないが、ががつと練習するタイプでもない。ポジション的には常にバックでリベロプレーヤーと交代するため、コートの中での情報を監督に伝える役目もある。練習時、気が付けば隣にいることも多く、自然に関係が保たれ安定した状態であり、相談事を持ちかけたり愚痴ってしまったりする。

試合が劣勢な状況であってもTKはカリカリすることがなく、フンワリとコートを見守っている。知らぬ間にイライラしていても自然と安定を取り戻す不思議な魔力を持っていた。現在、首都圏の商社できつとほんわかと空気を送りこみ、みんなを和ませているに違いない。

28) SA

(平成30(2018)年入学 長野県公立高校出身)

SAとの関わりはずいぶん昔のことで、彼女が2歳の頃まで遡ることになる。バレーボール関係のテレビ番組において、帯同する番組制作会社のスタッフに彼女の父親がいた。その後、年月が過ぎ、彼女が長野大学に入学して間もなく「私の父は野口先生のことを大変よく存じあげていると伺っています。」と満面の笑顔で近づいてきた。

穏やかな性格に見える表情も、コートに入ると一変する。とにかく最後は自分が点数を取らなければ……

という強い気持ちの持ち主であり、練習試合であっても表情は変わらない。上級生最後の大会で自分が決めきれなかったと必要以上に責任を背負ってしまうこともあった。練習中、他の選手とコート内で頭から激突し負傷する事故が起きた。病院へ付き添いながら後遺症の心配をしたが、無事に回復し親元に返すことができ安堵した選手でもある。在学中、一生懸命にバレーボールに向き合っていた姿が思い出される。社会での活躍が期待される選手の一人である。

以下、在学中の選手についても記載しておく。

29) SH

(令和元(2019)年入学 長野県公立高校出身)

前出のSMの妹で、姉と同じコートでプレーがしたいと入学を希望してきた。姉とは3歳の歳の差がある為、チャンスは姉4年生と妹1年生という1年のみのタイミングだけになる。この年度は3年に一度のホーム大会、北信越上位2チームに残らなければインカレ出場の道はない。また公立法人化したこともあり、今後有力選手を獲得できる目途もなく、最後の勝負をできる年と考えた。選手たち自身が話し合い、練習の質を上げることはもちろん、日常生活をも含めすべてに特化した集中的強化を図った。結果的には全国(インカレ出場)に届かなかったが、大会運営も担いながらの勝負でもあり、戦績以上に運営面では大きな成果を得ることができた。大会運営責任者でもある為、勝負に集中できなかったと自責の念に駆られた。「勝つのは選手の功績、負けは指導者の責任。」である。

保育士の資格取得を目標にしながらも、コロナによって多くの大会が中止され、大学でやり切れなかったバレーボールにさらに挑戦したいと、Vリーグのトライアウト(入団テスト)に挑戦し、みごと合格した。長野大学バレーボール部から2人目のVリーガーの誕生となる。大学バレーボール部は選手が7名しかいないことから、大学の選手として活動して欲しいのは山々ではあるが、大学登録を外し、大学4年生時にV2リーグにベンチ入りし参戦する方向で進めている。今後の活躍に期待したい。

30) YR

(令和元(2019)年 関東公立高校出身)

SHと同級の関東からセンター利用入試で入部したYRは、バレーボールの技術は高くはないが、バレー

ボールが好きだからと入部してきた。正直、すぐにやめてしまおうかと思っていたが、コツコツと努力を続け、4年次最後の試合にはリベロを含め7名の選手しかおらず、YRは絶対に必要な選手となった。彼女の頑張りには敬意を表する。また早々に関東圏大手損保企業に内定をもらっている。技術面においては人一倍苦勞したであろうが、顔に出すこともなく、弱音を吐くことも一度もなかった。常に自分の内面と向き合い努力してきた彼女は、コート以外でも力を発揮してくれることは間違いない。

31)HK

(令和2(2020)年 近隣県公立高校出身)、
TM(同)、KM(同)

この年、未曾有のコロナウイルスの感染拡大が広がり始め、活動が全く中止となった。何をどう対応していいかわからず、ただただ、感染を恐れて閉じこもった1年。もう少し何かできなかったかと悔やむことしかなかった。授業も全てオンラインとなりパソコンとだけ向き合い、顔を合わすこともなかった。チームスポーツでありながら集まることができない。組織を動かして何かあればとてつもない責任を覆うことになる。絶対に感染させてはならない。このことだけに集中した1年であった。

令和3(2021)年少し感染拡大が収まりかけ、練習も再開されたがレベルが上がる度に中止となる。バレーボールへの熱意がどんどん薄らいでいくことを感じていた。この年もほとんどの大会は中止された。それでも、選手たちはチームを離れることなく、黙々と自主練習を続けていた。それは、再開された時のコートの動きをみれば一目瞭然だった。そして令和4(2022)年3月、静かに強化指定部は閉じられた。

32)TI

(令和3(2021)年 長野県私立高校出身)、
SM(令和4(2022)年 近隣県公立高校出身)

「強化指定部が閉ざされるかもしれない・・・。」その不安と活動できない不安。少し回復してはまたシャットダウン。コロナによって少しずつ、少しずつ組織の存在が薄らいでいくのを感じた。まるで、コロナに強化指定部を閉じるための後押しをされているようでもあった。それでもバレーボールを長野大学でしたいと入部してきた学生が2年間で2人。しかし、彼女たちにバレーボールのステージを準備してあげることができるのだら

うか。

4. 大学スポーツ、特に小規模大学における団体競技の教育的有効性について

長野大学強化指定部としての女子バレーボール部は13年間に部員総勢57名(退部者含む)が巣立っていった。前述したように個性豊かな30名ほどの特徴的な選手の存在が、大学にとって大きな意味を持ち、在学生や教職員の大学に対する帰属意識の醸成⁹⁾に大きな影響力をもたらした。また、選手たちにとって大学とは単なる知識を獲得することのみならず、自己実現に向けたさまざまな経験が人生の糧となったはずである。では、このような効果をもたらすためには何が必要なのか。

まず、地方小規模大学における学生スポーツとは、学生数や大学施設の規模から考えても理解できるように、学生の自由にまかせていたのでは単なる同好会活動に終始してしまう。時折、個人競技などを中心に目を見張るような活動を展開する学生が入学すれば大学選手権出場などもありうるが、当該学生が卒業してしまうと同好会の維持すらできない状況にもなりうる。また、一般的な地方小規模大学では体育館やグラウンドという施設はあっても、屋内温水プールや弓道場などの特殊な環境が必要なスポーツの場合は学外に活動拠点を置くことも必要になる。しかしながら、大都市圏なら可能であっても地方の場合にはそれらの施設が身近にないことも多い。前述したカーリングやアーチェリー、あるいは競技スキーなどは長野大学近隣に競技場があることから活動が維持できたが、それ以外は困難であろう。つまり、地方小規模大学の大学スポーツにおいて地域の特性に応じた競技¹⁰⁾を選択的に運営していく必要がある。

一般的に地方の小規模大学では単一学部、あるいは2～3学部を擁する程度であり、学生スポーツにおいても当該大学の周辺の競技施設の有無や指導者の確保などによって絞り込むことが必要である。強化指定部を設置した折にもそのような検討をした上で、既存の大学施設を有効活用でき、指導者の確保も可能な2つの競技に特化することができたことから設置可能となったはずである。

長野大学における強化指定部の13年間は、日本の地方小規模大学における学生スポーツのあり方の一例を示すことができたと考えるのが妥当であろう。今後、日本ではさらなる少子化により地方小規模大学は

それぞれの特徴を生かした展開¹¹⁾がさらに求められることになる。今後の地方小規模大学におけるスポーツ競技の運営において、本稿がなんらかのお役に立てることがあれば幸いである。

5. まとめ

令和4(2022)年10月に4年生が引退し、現在バレーボール部は5名となった。またこのうちの1名は公務員試験に集中するためチームを離脱する。次年度の新入生を募って活動することになる。強化指定部としてのプロジェクトは終わったかもしれないが、長野大学でバレーをやりたいと入試を突破し入部している学生たちは在籍している。先輩たちが戦ってきた姿もみている。活気があったコートが今は閑散としている。特別な強化策でないにしても、なんとか大会に出られる選手が集まってくれることを願ってやまない。「長野大学女子バレーボール部は強い。」という残像に苦しみ、近寄りがたいムードはすぐには消えない。野口が存在が、彼女たちの仲間を増やす弊害なのかもしれない。

大学スポーツは学生自らが積極的に取り組むものであり、決して強制されるものではない。4年間という在学期間中に、学業とアルバイトだけではなく、仲間と切磋琢磨しながら社会へ向けての準備を行うための部活動はとても重要だと考える。意見の相違をぶつけ、助け合い、思いやりながら深いつながりを築き一生の友となる。これまでの13年間、勝つことよりも、社会に必要とされる人となるために指導してきたことの結果が出るのはまだまだ先かもしれない。

また、バレーボールの普及活動¹²⁾として近隣の小中学生たちと長野大学生との交流会を実施した。この活動は口込みで広がり、体育館はあふれんばかりとなった。このコンセプトも競技力向上は二の次、「学校部活などでは体験できないバレーボールの楽しさ」を提供した。土日や長期休みには、全国から高校が延べ何百人もの高校バレーボールが長野大学に集結し、切磋琢磨する場となった。オープンキャンパスの人数を遥かに上回る人数だった。平成31(2019)年に菅平で企画した「NEXT CUP」(春の高校バレーボール全国への出場をかけた試合で、一步届かなかった高校各県1校)大会では、「次は、私たち……」のスローガンを掲げて、日中には試合し、夜には交流会を開催した。高校生合宿にとっては異例の試みである。この企画は学生たちが大いに盛り上げてくれた。大会運営やイベントを企画する運営能力もいつか彼女たちの役に

立つと信じて開催したが、残念ながらコロナウイルス感染拡大とともに中止が続いている。再開するにも運営する学生がいないのはとても残念である。

令和5年度から中学、高校の運動部活動の地域移行が開始される。バレーボールに関することで長野大学が支援できることがあるかもしれない。

最後に、13年の活動期間中、地域の方々から多くの協力をいただいた。大会開催の為のパンフレット掲載広告集めにご協力いただいた多くの協賛企業様、合宿を受け入れてくださった上田市旅館組合のみなさんには感謝しかない。

強化指定部の事務担当をはじめ、会場まで足を運んで応援していただいた教職員の皆様、そして活動ができる環境を提供していただいた学校法人理事会の関係者の皆様方に心より御礼を申し上げます。

長野大学開学当初よりバレーボール部として活動されてこられた長野大学バレーボール部OB・OG会の皆様ともつながることができた。長野大学バレーボール部が益々発展することを願ってやまない。

大学改革の一端を担い、学生募集に貢献し、未熟な監督の元、元気な大学を作り上げてくれてきた選手たちに心から感謝したい。選手たち全員の掲載はかなわなかったが、長野大学の紀要に掲載することで、歴史の1ページとして残すことができれば幸いである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり女子バレーボール部の資料収集などにご協力いただいた強化指定部担当職員、論文をまとめるにあたりご助言をいただいた元長野大学教授で現在「情報バリアフリーラボ」代表の伊藤英一氏に心より感謝いたします。

引用・参考資料

- 1) 大学スポーツの振興に関する検討会議 “最終とりまとめ ～大学のスポーツの価値の向上に向けて～”、文部科学省(2017)
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/1383246.htm
- 2) 元五輪選手ら招きスポーツ部を強化 「信濃毎日新聞スポーツ(16面)」地域貢献と人材育成と4月から女子バレー部の指揮を執る野口京子氏、(2009.3.27)
- 3) スポーツのかたち 9 支える 広げる 信州発「信濃毎日新聞 スポーツ(21面)」

- 部活強化に進める県内私大 地域での受け皿役に
(2009.12.26)
- 4) 「スポーツを通じて大学を、地域を輝かせたい」
野口京子さん 「上田スポーツプレスvol.2(2面)」
(2012.11.15)
- 5) 蛇行のススメ ⑧ 人生模索 職歴重ね 「信
濃毎日新聞 地域(24面)」 講義で語る「熱い人
生論(2013.1.19)
- 6) 長野大女子バレー部・野口監督 普及に力 ス
ノーバレー菅平~発信 国内の「先進地」に 教
え子は国際大会出場 「信濃毎日新聞 地域(28
面)」 (2019.8.10)
- 7) 一般社団法人スノーバレーボールジャパン
<https://www.jsvf.net/>
- 8) ルートインホテルズ・ブリリアントアリーズ
<https://www.route-inn.co.jp/volleyball/member/>
- 9) 安西 祐一郎 「大学スポーツ改革の意義と今後
の展望」1・1 大学のコミュニティづくり
大学時報 p.77(2017)
- 10) 長大女子バレー部、地域貢献活動 障害者チー
ムと練習試合 「東信ジャーナル第4284号(3)面」
(2011.9.2)
- 11) 若林邦彦 初の「高大連携特別講座」長大で“大
学講義”を体験しよう 東御清翔高1年生が専門
講義受講 「信州民報第18559号」 (2012.8.4)
- 12) 長野大学のスポーツを通じた地域貢献活動 女
子バレーボール部の地域貢献活動
・坂城町講座楽しいバレーボール講座の開催・坂
城中学校へ部活動指導ボランティアの派遣
「Nagano University Community Cooperation
Center News Vol.10 p.8」
- 13) 野口京子:雪上バレーボール普及の可能性につい
て、バレーボール研究Vol.9, No.1, p.53-55, 2007, 日
本バレーボール学会
- 14) 野口京子:スノーバレーボールの現状と課題、バ
レーボール研究Vol.21, No.1, p.14-19, 2019, 日本バ
レーボール学会

表1 強化指定部バレーボール部の活躍記事

年月日	タイトル	誌名	発行元 ページ	概要	備考
2009. 3.27	”ロス五輪銅メダリスト” 女子バレー部監督就任	スポーツニッポン	スポーツニッポン 新聞社(22面)	”ロス五輪銅メダリスト” 女子バレー部監督就任	長野大学で日本一& 代表(ユニバーシアード)育てる。嶋田学長 ／柳町常任理事
2009.12.26	スポーツのかたち 支え広げる信州発	信濃毎日新聞	信濃毎日新聞社 (21面)	部活強化進める県内私 大	第2部 選手支援その思い
2009.10.22	長野大女子攻守で必ず 残留を	スポーツニッポン	スポーツニッポン 新聞社(20面)	野口新監督で春に1部 初昇格	「まとまり出てきた」
2010. 6.10	強化指定部活躍中	長野大学後援会報 (Vol.70)	長野大学後援会 (表紙)	選手紹介・大会案内	大会報告
2010.11.27	バレーボール全日本大 学選手権	スポーツニッポン	スポーツニッポン 新聞社(28面)	長野大学(女子)笑顔で 初陣	今秋北信越1部復帰! モットーは「エンジョ イ」
2010.12. 1	北信越大学選手権大 会一部昇格!!	CampusNews (特別号)	長野大学広報委 員会(裏表紙)	北信越大学選手権大会 で2部から1部へ昇格。 全国出場。選手12名	北信越大学選手権 1部昇格
2011.11.30	長野大エンジョイバレー で全国初勝利を	スポーツニッポン	スポーツニッポン 新聞社(22面)	84年ロサンゼルス五輪 銅メダル野口監督が導 く	
2011.12.20	大舞台で活躍する強化 指定部	長野大学後援会報 (Vol.73)	長野大学後援会 (p.1)	年間大会結果	1部リーグ3位過去最 高成績
2012. 6.12	大会報告	長野大学後援会報 (Vol.74)	長野大学後援会 (表紙)	大会報告 (2大会優勝報告)	信越大会・中部日本 県予選優勝

年月日	タイトル	誌名	発行元 ページ	概要	備考
2012. 6.29	第43回春季北信越大学バレーボール選手権大会「ベストセッター賞」受賞	CampusNews (Vol.75)	長野大学広報委員会(裏表紙)	大会報告チーム紹介／個人賞受賞	選手14名／仲間沙月
2012. 8. 4	初の「広大連携特別講座」ひらく	信州民報(第18559号)	信州民報新聞社	長大で“大学講義を体験しよう”	東御清翔高1 年が専門講義受講
2012.12. 4	長野大女子バレー初の決勝T1回戦突破だ	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(22面)	全日本大学選手権協会幕。テンポの速さと粘りで勝負	野口監督も期待「面白くなってきた」
2013. 1.23	母袋市長と「上田市スポーツ振興計画」を語る	上田スポーツプレス(Vol.3)	CI総研長野事務所(表紙～p.2)	新春特別鼎談	母袋上田市長／森体育協会会長／野口
2013. 6	大会優勝報告	CampusNews (Vol.84)	長野大学広報委員会	大会報告	中部日本予選県優勝
2013. 6.10	活躍する学生たちサークル活動紹介	長野大学後援会報(Vol.76)	長野大学後援会(p.6)	大会結果	中部日本県予選V3./信越準優勝
2013. 8	長大[学生]図鑑一輝く学生を紹介ー	CampusNews (Vol.86)	長野大学広報委員会(表紙裏)	バレー部紹介／選手インタビュー	中島絵梨奈／若林由里／秋葉夏海
2013.12.20	長野大学女子バレー部が出場報告(市長)	東信ジャーナル(第4872号)	(株)東信ジャーナル社(2面)	全国の経験を糧に「来春は北信越優勝」	市長表敬訪問
2013.12.21	長野大女子バレー部全国出場を報告	信濃毎日新聞	信濃毎日新聞社地域(22面)	全国大会出場などを報告する野口監督	市長表敬訪問
2014. 1.18	インカレ連続出場、初戦突破だ”!	上田スポーツプレス(Vol.9)	CI総研長野事務所(p.1)	インカレ出場へ向け練習に励む長野大学女子バレーボールチーム	
2014. 1.18	「勝ちたいという気持ちでチームを一つにした」	上田スポーツプレス(Vol.9)	CI総研長野事務所(p.2)	長野大学女子バレーボール部・インカレ出場へ	
2014. 1.18	長野大学女子バレーボール部が、全日本選手権出場を報告	上田スポーツプレス(Vol.9)	CI総研長野事務所(p.8)	母袋創一市長に出場の報告を行う	
2014. 4.19	昨秋の北信越大会で準優勝	週刊うえだ第1290号	週刊上田新聞社(7面)	全国大会に初出場	
2014. 5.22	長野大初優勝チャンス	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(22面)	地元で悲願だ!!ロス五輪野口監督が断言	レシーブの秋葉、サーブの村沢、得点力高い若林など粒ぞろい
2014. 5.24	長野大収穫と課題の1勝1敗	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(30面)	北信越大学選手権春季大会 第1日目	
2014. 5.24	女子の長野大1勝1敗発進	信濃毎日新聞	信濃毎日新聞社スポーツ(25面)	長野大一新潟医療福祉大 第3セット・スパイクを打つ女子1部の長野大・若林	
2014. 7	長大[学生]図鑑一輝く学生を紹介ー	CampusNews (Vol.95)	長野大学広報委員会(表紙裏)	バレー部紹介／選手インタビュー	壬生恵理子／井上美鈴
2015. 1	特集 学生×先生	CampusNews (Vol.100)	長野大学広報委員会	選手×監督 強化指定部女子バレーボール部	秋葉夏海／野口京子
2015. 12	後援会奨励賞が決定!!	長野大学後援会報(Vol.81)	長野大学後援会(p.1)	個人賞(上原さつき 第70回国民体育大会長野県成年女子代表)／	嶋倉可奈／前田 萌／林 莉帆
2016. 5.25	長野大「六文銭」に初V誓う	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(30面)	ロス五輪銅メダリスト野口監督が指導・県内開催に新ユニフォームで士気上がる	

年月日	タイトル	誌名	発行元 ページ	概要	備考
2016.11.23	六文銭入りユニで予選突破へー丸	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(24面)	江戸で名売る真田十八勇士	自主性重視 北沢主将「常に攻めていきたい」
2017. 8.26	後援会奨励賞授与式を開催いたしました	長野大学後援会報 (Vol.84)	長野大学後援会 (p.1)	個人賞(平原果歩・春季北信越大学選手権大会優秀選手賞)／(前田萌・秋季北信越大学選手権大会ベスト6に選出)	
2018. 1	迎春長野大学バレー部紹介	上田法人第127号	一般社団法人 上田法人会(表紙)		
2018. 10	SPECIAL FEATURE 特集 内定者インタビュー	CampusNews (Vol.115)	長野大学広報委員会 (p.2)	平原果歩 ルートインジャパン株式会社	ブリリアントアリーズバレー部入部
2019. 1.24	時代を先読み新分野拓く	東信ジャーナル(第6167号)	(株)東信ジャーナル社 (p.8)	バレーで上田を全国アピール	平原 果歩
2019. 5.15	長野大女子地元Vアタック	スポーツニッポン	スポーツニッポン新聞社(22面)	白石主将「優勝しか考えていない」団結力で頂点へ	学年の壁なく仲いいチーム
2019. 7.25	信濃グランセローズ×県内出身プロスポーツ選手 座談会	信濃毎日新聞	信濃毎日新聞社 全面広告ABCD	2019年ルートインホテルズ・ブリリアントアリーズ入部 平原 果歩	長野大学強化指定部 卒業
2019. 8.10	スノーバレーボール菅平から発信	信濃毎日新聞	信濃毎日新聞社 地域(28面)	長野大女子バレー部・野口監督普及に力	国内の「先進地」に教え子は国際大会出場
2021. 3.	地域の輝く少年少女たちを全力応援!	三好町タイムス	有限会社東郷堂	～長野大学女子バレーボール部編～	地域の輝く少年少女たちを全力応援!